

／＼食べ放題！



“お米つき住宅”ができたらしいね



阿蘇の美しい景観をつくる農業

—— 大津耕太さん・愛梨さん

大都会、東京での暮らしから一転、雄大な自然に抱かれた南阿蘇に移り住んだ大津耕太・愛梨夫妻。2人が育てるお米は、食卓に「安全」と「おいしさ」を届けるとともに、美しい阿蘇の景観を守っている。

農家が守る 美しい阿蘇の草原と田園風景

熊本空港から車を走らせると、窓の外に広がる景色に思わず目を奪われる。世界最大級といわれる阿蘇カルデラの雄大な自然。日本一の面積を誇る草原。まるで日本ではない、別の国の絵葉書を見ているようなスケール。大津夫妻が営むOZFarm（オーツーフーム）は、そんな美しい阿蘇カルデラの風景の中にあつた。

「一見すると、阿蘇は大自然のようには見えませんが、実はその風景のほとんどは人の手が入ったもの。じゃあ、誰がその景観を守っているのかというと、国立公園のレンジャーでもない。みんなが美しいと言ふ風景の8〜9割方は、農家によって維持されているんです」と耕太さん。

たとえば、観光資源でもある阿蘇の草原は、農家が牛を放牧したり、春に野焼きをしたりすることで長い間守られてきた風景だ。棚田などの美しい田園風景も、米を作ることで維持されている。農地を使うことが、風景や国土、動植物のすみか、さらには、きれいな水を守ることなどにつながっている。

特集

実際、大津夫妻の田んぼも、さまざまな役割を果たしている。基盤整備をしていない、高低差のある多様な形の田んぼは風景として美しく、コンクリートで固めていない水路、夏にはホタルが舞う。また、農業を使わないことで、たくさんの動植物にすみかを与えている。

こうした米作りは、手間がかかる。だが、手間をかけることで、生き物や風景の多様性を維持することができる。大津夫妻は言う。「おいしいお米でなければ、はじまりませんが、農村の豊かさや風景の美しさをお客様に伝えることができれば、食卓はもっと豊かになると思っています」

食べる人が見えている幸せ、

毎月70軒へ産直

2人は大学時代から地域計画や環境とともに学び、そろって留学したドイツの大学院では農村計画をテーマに研究した。そんな2人が一転、就農を決意したのは、東京という都会で一日に1度も土を踏むことなく、農業や農村のことを考えることに疑問をもち始めたからだ。背中を押したのは、愛梨さんだった。



「もう、彼の顔からだんだん生氣が消えていって、しょんぼりしだしたんですね。それまでずっと同じ授業を受けてきて、お互いにはつきり口には出さなかつたけど、いずれは自分たちで農業をするというイメージはあった。だから、「よし！じゃあ、やるか」って」

南阿蘇は、耕太さんの祖父が農業を営む土地。そこで、叔父の後継者として、農地や機械が一通りそろった状態で就農することができた。なにより、早くから叔父が無農薬米の産直に取り組んでいたことも大きかった。

地元の農家20軒でつくられている生産組合では、「おいしい」「あぜんせん」「しんせん」「すてき」の頭文字から「おあしす米」と名づけられたコシヒカリを、全国900軒



田植え前の田んぼでバレー大会

以上の家庭に産直販売している。田んぼに鯉か合鴨を入れる米作りを、「ゴイ」と「アイガモ」をかけて「恋愛農法」というユニークな名前と呼んでいる。

大津夫妻も、この「おあしす米」を作り、毎月約70軒の家庭に送る。特に、「おあしす米」は生産者と消費者の1対1のつき合いを大事にし、同じ農法で作っても、基本的に農家の米は混ぜないシステムをとっている。

「毎月、精米したてのお米を届ける時、稲の様子や1ヵ月の間にわが家や村で起きたことなどを書いてお手紙をつけるようにしています。そうすると、お客様の方からも振込用紙の通信欄に「いつもありがとうございます」とか「受験生の息子に夜食のおにぎりを作っています」とか書いてきてくださるんです。雨がひどかったとか、子どもが風邪をひいたと書くと、電話をかけてきてくれる方もいる。誰に食べてもらっているかがわかるのは、生産者にとっては本当に幸せなこと」と愛梨さん。

また、実際に消費者とふれ合う「パーベキュー大会」も毎年開催されるといふ。耕太さんも、こう言う。

「今は、安心や安全の関心が高まって、生産者の顔写真を貼った顔の見える農産物」がたくさんあるけど、生産者から消費者が見えないのが普通です。でも、顔を知っている人に売るなら、不正

や手抜きなんてあり得ないし、なによりあの人に合わせざる顔がないという思いが生産者のよりよいお米を育てる力になる」

どんな時でも食べられる、お米をセーフティネットに

就農して6年。2人は景観を守りながら農産物を育てるだけでなく、さまざまな取り組みも行ってきた。仲間を集めて、代かき前の水田で行った田んぼバレー大会、土や草などを使って作品を創作する、「農」と「アート」がひとつになった「LAND&ART」イベント。

また、農村の楽しさや豊かさを知ってもらうために、修学旅行生など年間50組以上の宿泊を受け入れているほか、愛梨さんは食料だけでなく、菜たね油などでエネルギーもつくり出すとNPO法人を立ち上げた。

そこに暮らす人が楽しみ、美しい風景や生物の多様性を守る農村。2人が目指すのは、「明るい農村」づくり、笑いの絶えない「百笑生活」だ。そのお手本となり、常に2人の理想としてあるのは、環境先進国ドイツで見た農村の姿だといふ。「とにかくドイツの農村のきれいさは、衝撃的だったんですね。ここを散策しても村全体が絵葉書のように美しく、村もそれをウリにしている。だから、都会の人たちも週末になると、農村に遊びに行く。ドイツは隣国が地続きだから、

おおつ・こうた
1975年、熊本市生まれ。慶応義塾大学環境情報学部卒。専門は景観計画で、3年半ドイツに留学し、ミュンヘン工科大学で修士号を取得。03年から阿蘇郡白水村で農業を始める。
おおつ・えり
1974年、ドイツ生まれ。慶応義塾大学環境情報学部卒。高校時代にイギリスに留学も経験。耕太さんと99年に結婚。3児の母。



国境沿いの農村が荒れると、隣国との問題も起きやすいという事情もあって、農村はきれいにしておかなければいけないという国民的な合意がある。田舎がきれいな国は豊かな国が多くて、農民が掘っ立て小屋に住んでいるようなところは軍政や独裁が多いのかなという気がします」

「もし、日本から農業がなくなったら、景観や国土を守ることができなくなります。それは、戦争やエイズが私たちの生命を脅かすのと同じレベルで危険なことなんだという共通認識がもたらいいなあと思います」

でも、と二人は続ける。「学生時代にはすでにバブルが崩壊していた自分たちの世代はけっこうシビアだし、上からのキャンペーンで動くようなタイプとは違うよう

に思うんです」。だからこそ、個人の良心にのみ訴えるのではなく、食べる人が納得するような仕組みで、お米の消費が伸びるアイディアはないかを常に探している。

「たとえば、『お米つき住宅』なんてどうだろうか、2人で言っているんです。家賃はお米代込み。上限は設けるとしても、お米を食べる間はお金がかからない家。でもパンや Pasta だったら買わなきゃいけない。そうしたら、きつとみんな家族でせつせとお米を食べますよね(笑)。仮に失業しても、お米だけは毎日ちゃんと食べられるような、一つのセーフティネットになるかもしれない。もつと言えば、どんなことがあっても、絶対にお米だけは食べられる国って、最高の福祉国家ですよ(?!)」

⑧(稗田和博)